

ビデオフォーラムを用いた園内研修

○ 平林祥 (ひかり幼稚園)
 中橋美穂 (大阪教育大学)

【目的】

日々の保育をふり返り、評価し、新たな計画を立案して実践に活かす力は、保育の専門家に必要なものである。この専門性を高めるために、様々な研修方法が検討されている。筆者らは、専門性の一要素である「子どもの育ちを見取る力」を向上させる研修として、ビデオ記録を利用して、子どもの具体的な姿を出発点としながら園の職員が協働して見取りの質を高める「ビデオフォーラム(以下、VF)」の在り方を検討してきた(平林ら,2011、中橋ら,2012)。

本発表では、VFを用いた園内研修の取り組みと、その結果の分析について報告を行う。

【ビデオフォーラムの手順】

- 1) 趣旨の説明
- 2) ビデオ記録の文字資料に目を通す
日時、子どもの年齢、前後のできごとなどを記載。
- 3) ビデオ記録の視聴 (2回)
5-10分程度。VF実施園とは異なる園のビデオを使用。
- 4) 観察分析シートに自分の見取りを記入する
分析の視点を項目化した観察分析シート(以下、OAS)に、それぞれの見取りを記入。
- 5) 小グループでそれぞれの見取りを話し合う
6名程度の小グループで。話題は限定せず。
- 6) ふりかえりシートを記入する
研修への参加度や満足度、感想などを記入。

【VFの効果の分析】

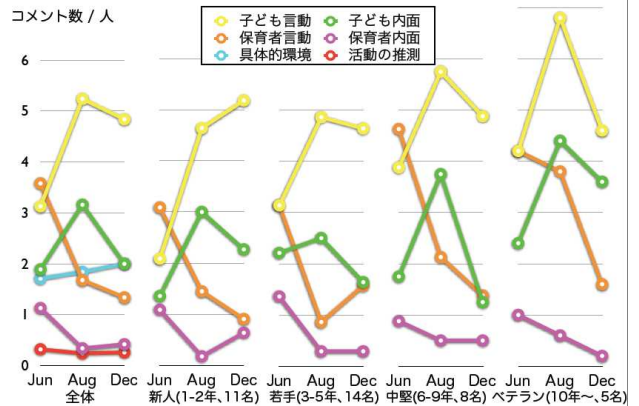
- 1) OASの記述内容の分類
 - ・2010年6月(12園、183名)
 - ・2010年8月(33園、313名)
 - ・2010年6月(6園、75名)

上記3回のVFで、同じ組み合わせのビデオを使用した3園38名のOAS記述内容を分析した。

OASの記述内容は以下の7項目に分類できた：

- 子どもの具体的な言動
- 子どもの内面の推測
- 保育者の具体的な言動
- 保育者の内面の推測
- 物的環境やルール
- 遊びや活動の推測
- その他

2) 経験群内での記述内容・記述数の比較

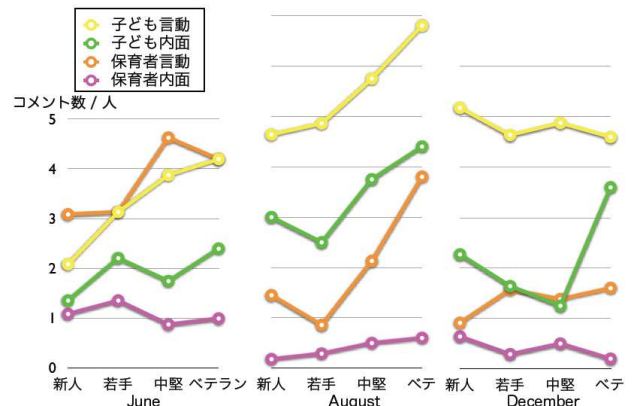


7項目の記述数の変化を、6月8月12月と図示したのが上図の左のグラフである。6月は□保育者の具体的な言動(橙)の記述が最も多く、次に□子どもの具体的な言動(黄)の記述が多かった。8月12月と記述数の変化を追うと、□子どもの具体的な言動(黄)の記述数は増え、□保育者の具体的な言動(橙)と□保育者の内面の推測(紫)の記述数が減少している。

38名を経験年数毎に4つの群に分けて、それぞれの群の記述内容の変化を図示したのが、残り4つのグラフである。新人(1-2年目11名)、若手(3-5年目14名)、中堅(6-9年目8名)、ベテラン(10年以上5名)と分けた。□物的環境やルール(青)及び□遊びや活動の推測(赤)の項目では顕著な変化が見られなかったため、グラフを見やすくするため除外した。

38名全体のグラフと同様に、各群で□子どもの具体的な言動(黄)の記述数が増加し、□保育者の具体的な言動(橙)と□保育者の内面の推測(紫)の記述数が減少する傾向が見られた。

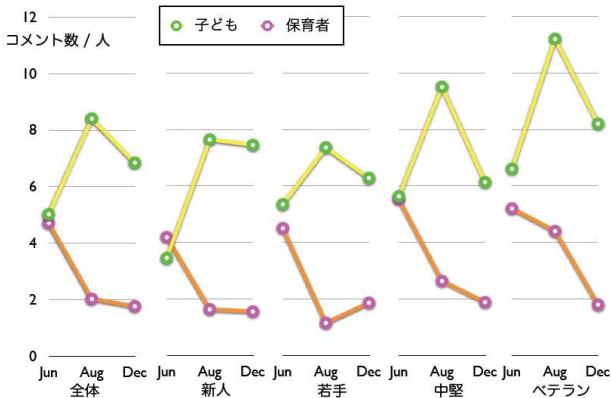
3) 経験群間での記述内容・記述数の比較



次に、各経験群の記述内容と記述数を各月毎に比較した。6月と8月には、経験年数が大きい群ほど記述数が多い傾向があった(□子どもの具体的な言動(黄)、□子どもの内面の推測(緑)、□保育者の具体的な言動(橙))。12月には、□子どもの具体的な言

動(黄)と□保育者の具体的な言動(黄)の2項目で経験群による記述数の差は小さくなった。

4) 子ども(□+□)と保育者(□+□)の記述数の比較

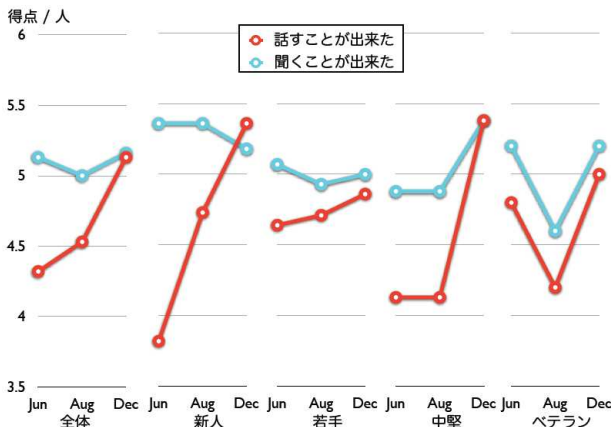


続いて、子どもに関する記述(□+□)と保育者に関する記述(□+□)をそれぞれ合計し、全体(一番左)及び各経験群(残り4つ)の記述数の経時変化を図示した。程度の差はあるが、全ての経験群で子どもに関する記述が増え、保育者に関する記述が減る傾向が見られる。

新人群(1-2年目)に限って考えると、6月から12月の間に保育経験を積むことで、ビデオ記録を視聴した後にOASに記述する内容やその数が大きく変化することは自然な変化と言える。しかし、同様の変化が経験年数10年以上のベテラン群にまで共通して見られることから、この変化にはVFを用いた園内研修が影響していると考えた。

【VFの効果の検討】

記述内容と記述数の変化に対するVFの効果を検討するため、VF終了後に参加者が記入した『ふりかえりシート』を分析した。



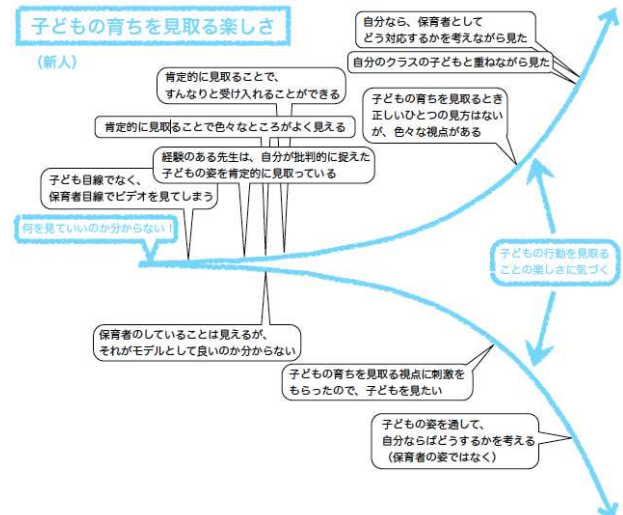
1) ふりかえりシート・選択式アンケートの回答

ふりかえりシートで、グループでの話し合いで「話すことができたか(赤)」と「聞くことができたか(青)」を6段階で尋ねた項目の回答を図示した。回答は自己評価であるが、「聞く」ことの評価は6月から一貫して高く、大きくは変化しなかった。「話す」ことへの評価は、6月のVFでは「聞く」と比較すると低く、8月12月とVFの回数を重ねることで、特

に新人群と中堅群で評価が大きく上がった。

2) ふりかえりシート・自由記述アンケートの回答
次に、ふりかえりシートの「話し合いのなかで、誰のどんな言動が印象に残りましたか」という設問への回答を分析した。1)の結果も踏まえ、回答をVF実施時期と経験群で整理したところ、新人群、若手・中堅群、ベテラン群の3類型に分類できた。

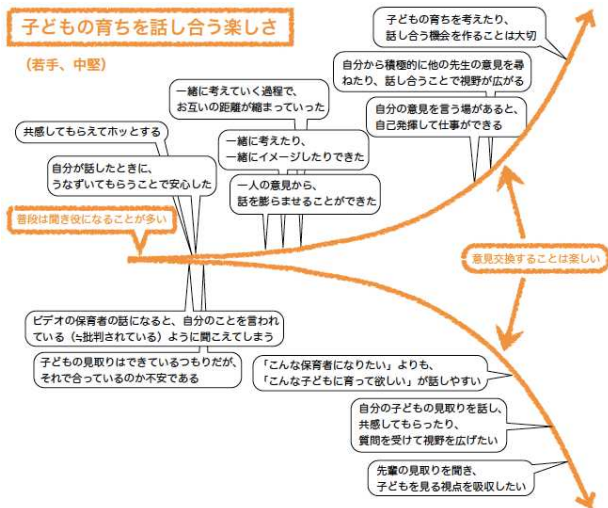
2a) 新人群の変化の分析



新人群は、6月のVFでは「何を見ていいかわからない」と感じ、グループでの話し合いを通して「(自分)子ども目線ではなく、保育者目線でビデオを見てしまう」「経験のある先生は、自分が批判的に捉えた子どもの姿を肯定的に見取っている」「(子どもを)肯定的に見取ることで、すんなりと受け入れることができる」などの記述をしている。

2回、3回とVFを繰り返すなかで、「子どもの育ちを見取るとき正しい一つの見方はないが、色々な視点がある」「自分のクラスの子とも重ねながら見た」「自分なら、保育者としてどう対応するかを考えながら見た」といった記述が見られた。新人群は、VFで同じビデオ記録を経験年数の大きい同僚と視聴して話し合うことで、子どもの行動や育ちを見取ることの楽しさに気づき、それが子どもに関する記述(□+□)の増加と保育者に関する記述(□+□)の減少につながったという仮説を立てた。

2b) 若手・中堅群の変化の分析

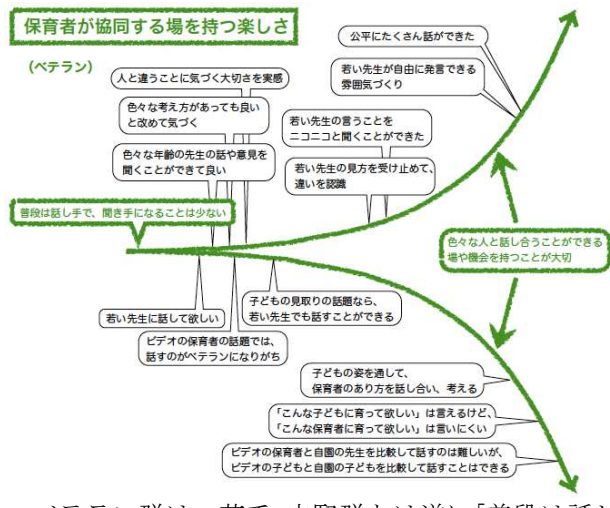


若手群と中堅群は、アンケート回答で共通部分が多かったため、1つにまとめて扱った。

6月のVF終了後のアンケートでは、普段は聞き役になることが多いという記述が見られた上で、「自分が話したときに、うなずいてもらうことで安心した」「共感してもらえてホッとする」「子どもの見取りはできているつもりだが、それで合っているのか不安である」「ビデオの保育者の話になると、自分のことを言われている(と批判されている)ように聞こえてしまう」などの記述が見られた。自分の見取りや意見が同僚たちに受け入れられるのかという不安や、受け止めてもらえた安心感など、保育者集団を意識した記述は新入群には見られないものである。

VFの実施を重ねていくなかで、「一緒に考えていく過程で、お互いの距離が縮まっていった」「一人の意見から、話を膨らませることができた」「一緒に考えたり、一緒にイメージしたりできた」「自分の意見を言う場があると、自己発揮して仕事ができる」「自分から積極的に他の先生の意見を尋ねたり、話し合うことで視野が広がる」「子どもの育ちを考えたり、話し合う機会を作ることは大切」など、意見交換することの重要性や楽しさを実感していると示唆する記述が多く見られたのが若手・中間群の特徴である。その意見交換をする際に、「こんな保育者になりたい」と保育者を話題にするよりも、「こんな子どもに育って欲しい」と子どもを話題にした方が話しやすいことが、若手・中堅群での子どもに関する記述(□+□)の増加と保育者に関する記述(□+□)の減少につながったという仮説を立てた。

2c) ベテラン群の変化の分析



ベテラン群は、若手・中堅群とは逆に「普段は話し手で、聞き手になることは少ない」という記述が見られた上で、「色々な年齢の先生の話や意見を聞くことができ良い」「人と違うことに気づく大切さを実感」「若い先生に話して欲しい」と書き、「ビデオの保育者の話題では、話すのがベテランになりがち」「子どもの見取りの話題なら、若い先生でも話することができる」などの気づきを記述していた。

VFの実施を重ねていくなかで、「若い先生の言うことをニコニコと聞くことができた」「若い先生の見方を受け止めて、違いを認識」「若い先生が自由に発言できる雰囲気づくり」「公平にたくさん話げできた」など、経験年数の異なる保育者と話し合うことができる場や機会を持つことを大切に感じていることを示唆する記述が多く見られた。そうした場を作る方法として、ビデオに映る(保育者でなく)子どもの姿を通して保育者のあり方を話し合い、考えるなどの工夫をしており、その結果として子どもに関する記述(□+□)が増加し、保育者に関する記述(□+□)が減少したという仮説を立てた。

これらの仮説の検証は、今後進めていく。

【VFの作業の意味】

VFには、大別すると「見る」「書く」「話す」「聞く」の4つの作業がある。

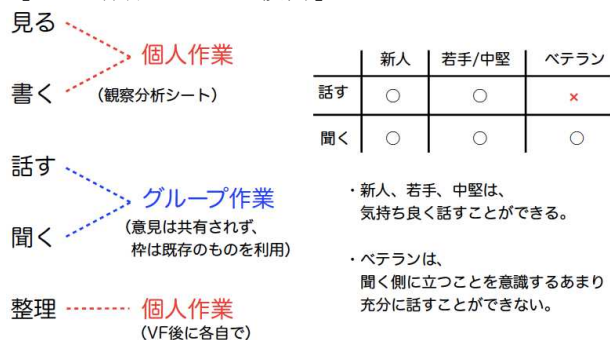
ビデオの視聴(見る)では、他園の保育のビデオ記録を使用することで情報量を減らし、その分見取りの自由度が高くなるように意図している。

OASの記述(書く)では、自らの見取りを整理してグループでの話し合いの際に話しやすくするとともに、視点の枠組みを意識することで自分の見取りを客観的に把握できるように意図している。

グループでの話し合い(話す、聞く)では、話し手として同僚に伝えることを意識して自分の見取りを整理する(書く)と重複)ほか、聞き手として同僚の見取りを取り込むことで保育の見取りが増える/広がる/深まるように意図している。そういった見取りの多角化・多様化とは別に、情緒的な側面から見ると、自分の見取りを同僚に聞いてもらい受け止めて

もらうことが嬉しかったり、同僚の見取りを受け止める/共感する/共有することによる共同体意識や帰属意識の高まりにもつながるのではないかと、今回の分析を行うなかで感じた。

【VFの作業方法の再検討】



VFの作業手順は上図のようにまとめられる。「見る」と「書く」が個人作業なのは仕方ないが、「話す」と「聞く」作業のときにOASの記述内容が全て共有されておらず、参加者が発言したものしかグループでは共有されない。また、整理に関しては、OASで分析の視点を予め提示しているが、実質的に参加者がそれぞれに行っており、共有はされていない。

子どもの育ちを見取る力を向上させるという目的と照らし合わせて、VFの手順を変更した。

VF(2.0)の手順 → VF(3.0)の手順

- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ① 趣旨の説明 ② ビデオフォーラム資料に目を通す ③ ビデオ視聴 (2回) ④ 観察分析シートに自分の見取りを記入する ⑤ 6人程度のグループ (経験年数混合) で、それぞれの見取りを話し合う ⑥ ビデオ視聴 (1回) ⑦ ふりかえりシートの記入 | <ul style="list-style-type: none"> ① 趣旨の説明 ② ビデオフォーラム資料に目を通す ③ ビデオ視聴 (2回) ④ 付箋紙に自分の見取りを記入する ⑤ 6人程度のグループ (経験年数別) で、それぞれの見取りを話し合う ⑥ 出た意見を分類、命名して整理する ⑦ 他のグループの意見を観覧する ⑧ 自グループの意見を見直す ⑨ ビデオ視聴 (1回) ⑩ ふりかえりシートの記入 |
|--|---|

「見る」作業は変更しなかった。「書く」作業では、OASの使用をやめて、項目によって色分けした付箋紙に参加者が意見を一つずつ記入することにした。付箋紙に書くことで「話す」「聞く」作業の準備として自分の見取りを整理することができ、(重複しても)全ての付箋紙を模造紙に貼り出すことで全ての意見を『グループの意見』として共有できるようにした。模造紙上で付箋紙の位置や関係を変えることで、「整理する」作業もグループで行い、共有することができる。

本発表で結果を分析したVFは、全て経験年数を混合したグループで実施したが、手順を再検討したVFでは、経験年数別のグループで実施した。経験年数を混合したグループでは、新人・若手・中堅群が気持ちよく話すことができる一方で、ベテラン群が聞き役に回るために発言しにくくなるのではないかと考えたからである。経験年数別のグループで行った成果物(模造紙+付箋紙+書き込み)では、経験年数の違いによる見取りや整理の仕方の変化が顕著になった。グループでの話し合いの後に、他のグループ

の成果物をギャラリー形式やワールドカフェ形式で見て回り、最後に自分のグループに戻って改めて自分たちの成果物をふりかえってもらっている。

作業方法を再検討した新型VFの結果の分析は、今後行っていく。

【今後の取り組み】

VFの結果を分析することで、「子どもの育ちを見取る力」に関する考察が深まった。保育者の見取りは、個人個人で独立したものではなく、同僚の保育者との意見交換や関係性ともつながるものなのではないかという示唆を得た。今後はVFの手法を適宜変更しながら実施を続け、その結果の分析を通して保育者の専門性の一部としての「子どもの育ちを見取る力」の理解を深めるとともに、その力の向上に有効な研修をあり方を模索していく。

【レファレンス】

平林祥ら「保育者の資質向上を目指すビデオフォーラム」日本乳幼児教育学会第21回大会研究発表論文集 pp.186-187

中橋美穂ら「保育者の資質向上を目指すビデオフォーラムの効果の検討」日本保育学会第65回大会発表要旨集 pp.761